

# 村井章介の「境界人」の概念および〈倭寇＝境界人〉説 の立論についての批判的検討

ソンジョン ホ  
宋鍾昊

(韓国放送通信大学大学院)

## Ⅰ. はじめに

14世紀及び15世紀初めに主に朝鮮半島地域に現れた倭寇、いわば「前期倭寇」が発生した原因及びその主体に関し、韓国と日本の研究者の間には大きな意見の違いがある。韓国の研究者の間ではその主体を日本人であると捉える見解が長らく支配的であり、日本の研究者の間でも1980年代中頃まで「前期倭寇の主体は日本人、後期倭寇の主体は中国人」という見解が定説であった<sup>1)</sup>。しかしながら1987年に提起された田中健夫氏の「高麗・朝鮮人主体説」<sup>2)</sup>と高橋公明氏の「高麗・日本人連合説」<sup>3)</sup>、そして1990年代に提起された村井章介氏の〈倭寇＝境界人〉説を基に、いかなる構成であれ一部の高麗人が倭寇に参加していたという見解が現在日本学会の主流となっている。

このうち「高麗・朝鮮人主体説」と「高麗・日本人連合説」については、李領氏<sup>4)</sup>及び浜中昇氏<sup>5)</sup>など数人の研究者によってその根拠が薄弱であるとの批判が提起されてきたが、村井氏の〈倭寇＝境界人〉説についてはその見解の全体的な妥当性について最近に至るまで関連する研究者による本格的な検討がなされていなかったと思われる。

そこで、以下の第二章においては〈倭寇＝境界人〉説について議論する上で重要な概念となる「境界」と「境界人」の意味について検討し、第三章においては〈倭寇＝境界人〉説の立論過程における論理の流れ及び史料引用の問題などについて検討したい。

## Ⅱ. 村井氏の〈倭寇＝境界人〉説の議論における重要概念についての検討<sup>6)</sup>

村井氏の境界人論を簡略にまとめると以下の通りである。

- ①面積のない国鏡線と領土の排他性からなる国土観念をもつ近代国家とは違って、前近代では、国境は輪郭不明瞭なひろがりであり、そこに境界人が生きる<sup>7)</sup>。
- ②境界人は貿易（交易）、外交、海賊など、内と外とを結びつける活動を生きる糧とする<sup>8)</sup>。平時には、国家のはざまを生活の場とし、異なる国家領域を媒介することで生きる人々が、戦乱、飢饉、政変、貿易途絶などの特定の状況下で、海賊行為に走る<sup>9)</sup>。

上記のような村井氏の記述を基に、以下では「境界」及び「境界人」という概念が意味するところについて検討したい。

## 1. 「境界」

ブルース・バートン (Bruce Batten) が言及した通り、「境界」の概念は政治的・軍事的境界としてのバウンダリー (boundary) と非政治的側面でのフロンティア (frontier) に区分できる<sup>10)</sup>。

まず、第一に、バウンダリーに関し、村井氏は時代区分については言及せず、「戦争に関わる境界は現代の境界のような「線」に近い特徴をもつ」とした<sup>11)</sup>。即ち、少なくともバウンダリーの意味としての「境界」は、前近代の時期においても比較的明確な線としての形で存在していたとみることができる。

一方、交易又は貿易を生業とする人々の活動領域を指す非政治的側面でのフロンティアは、無論のことバウンダリーを超えて形成されるものである。こうした意味から前近代におけるフロンティアが不明確であったというのは勿論のことだが、近現代におけるフロンティアもまた、移動手段及び通信の発達に伴い過去に比べより広範囲な領域となっており、不明確さが増している状態だといえよう。

こうした点を念頭に置き、上記境界人論の①を再読してみると、「近代においては国家間の境界が明確であるが、前近代においてはその境界が不明確であった」という記述の「境界」は、政治的側面としての境界 (boundary) でも非政治的側面としての境界 (frontier) でもないため、この理論で前提としている「境界」の意味は曖昧なものであると思われる。

第二に、境界の概念のうち、バウンダリーの側面からみると、中世において韓国、日本、中国など東アジア三国の間にはとりわけ明確な「境界」が存在していた。村井氏も 1019 年の「刀伊の入寇」のさい、退却する女真族を追撃する日本軍に対し「日本の境を限りとして追撃せよ、新羅の境には入るな」という指示が出されていたと記録された『小右記』寛仁三年四月二十五日条を引用し、「日朝間の境界は、長い歴史を通じて動くことが少なかった」としている<sup>12)</sup>。このようにバウンダリーとしての「境界」の明確性如何はその時代が近現代であるか前近代であるかによって決定されるのではなく、境界の向かい側にある国家又は民族の政治体制、国力などの諸条件によって決定されるものであり、当時、日本に比べ極めて中央集権的官僚制国家としての性格が強かった高麗・朝鮮及び中国の場合、日本との境界が明確であったのは寧ろ当然のことであった。

要するに、村井氏によると「境界人」とは、面としての境界空間の上で生活する人々を意味するが、こうした境界空間が存在しなかった朝鮮半島や日本の間では、その「境界人」の概念が適用できなくなる<sup>13)</sup>。

## 2. 「境界人」

次に、「境界人」の概念に対し村井氏が想定したであろう定義について検討したい。

### (1) 広義での「境界人」の概念であるか

まず初めに、村井氏の挙げる「境界人」の例についてみると、対馬、濟州島など境界空間に暮らす居民以外に、高麗の禾尺・才人<sup>14)</sup>、倭寇に捕虜として捕らえられていった人々 (被虜人)、朝鮮系

倭人<sup>15)</sup>、朝鮮人と詐称した倭人、倭語訳官の朝鮮人<sup>16)</sup>、国際貿易を行う朝鮮人と倭人<sup>17)</sup>、北海道地方のアイヌ人、北海道地方の和人、日本列島南端の島嶼地方住民、琉球人、日本のキリシタン<sup>18)</sup>などが含まれており、彼らの活動時期は少なくとも数世紀に渡っている。

研究方法論の側面から、上記の人々を全て包括する広義での「境界人」の概念下では、一つの集団として分析可能な「境界人」の集団は存在しないものと思われる。彼らを「境界人」として範疇化すること、例えば、高麗の済州人と日本のキリシタンを範疇化し、彼らの行動様式や特定行為の目的など共通する特徴について記述するのは無意味であると考えざるを得ない。また、研究対象の地域を朝鮮半島に限定し、例えば、14世紀の禾尺・才人と16世紀の朝鮮人訳官を範疇化してみるのも同じであろう。

したがって境界人論で言及している「境界人」とは、上記のような多様な部類の人々を一つの集団として表す広義での「境界人」の概念ではないと解釈したい。

## (2) 狭義での「境界人」の概念であるか

次に、境界人論における「境界人」を地域的特徴及び近接性という基準をもって解釈してみたい。こうした基準に基づき「境界人」の活動地域として村井氏が挙げた地域は、倭寇又は「倭人」の脈絡の中でのみ把握した場合においても、その著書の中での記述が完全に一致しているわけではないが<sup>19)</sup>、概ね対馬、壱岐、済州島、朝鮮半島南海岸、中国舟山諸島以南の長江河口地域の島嶼地域を意味するものであると思われる。

この狭義の定義が境界人論における大半の理論展開で使用されているため、これに関する検討は重要であろう。しかしながら、こうした定義の下でも次のような問題点が指摘できる。

第一に、こうした狭義の「境界人」の概念には、村井氏が「境界人」の例として挙げていた禾尺・才人、倭寇による被虜人、朝鮮系倭人、朝鮮人と詐称した倭人、倭語訳官の朝鮮人、国際貿易を行う朝鮮人などは含まれていない。即ち、彼が提示した事例を全て包括できる定義を作ること自体が不可能であるという意味である。

第二に、狭義の「境界人」の概念に含まれた集団内においても、その地域別・集団別の特殊性が考慮されていない。例えば、日本と朝鮮半島との空間と日本と琉球との空間には、その歴史的背景、産業、富の度合いなどにおいて大きな違いがある。特定の歴史的背景を有する一部の事実を一般化し、これを境界人に対する一般論として議論を展開する場合、個別の歴史現象や事件に関する具体的な分析において誤謬が生じる恐れがある。

第三に、同じ境界空間の中でも、歴史的背景、政治的状況、文化、職業、その他利害関係などの違いを持つ複数の集団があるが、彼らを一つの集団として捉えることができるかについては疑問である。

「境界人」という一つの集団が歴史研究の目的上意味を持つためには、「境界人」を構成する人々が一つの集団であるという意識の下で生活と行動を共にしていたという点が前提にならねばならない。例えば、中世の地中海にも広範囲に渡る境界空間が存在しており、そこには「境界人」に当たるイスラム人、イタリア半島海岸の地域住民、ベネチア人、シチリア人、マルタ人、キプロス人、ビザンチン人などがいたが、彼らを全て「地中海境界人」として定義し、その出身国家や地域、宗教、政治的状況、利害関係などを無視して一つの集団として捉え、その歴史を研究するということが想像しがたい。

したがって同じ空間に暮らす「境界人」が互いに同じ文化を共有し、交流及びコミュニケーションを取り、同じ集団に属しているという集団意識を持ち、政治的又は経済的利害関係が同じであってこそ、特定の歴史的事件又は現象を説明するにおいて彼らを「境界人」という一つの集団として捉えることができるであろう。

第四に、狭義の「境界人」の活動地域、即ち対馬、壱岐、済州島、朝鮮半島南海岸、中国舟山諸島以南の長江河口地域の島嶼地域は、村井氏が自らの恣意的基準によって区画した領域に過ぎないと思われる。

村井氏の基準によれば、「倭人」の主な活動領域の住民（例えば、「三島」の住民、朝鮮半島南海岸の住民、中国南東海岸の住民）は同質性のある一つの「境界人」の集団として扱われている反面、その他地域の住民（例えば、九州南部地域の住民、瀬戸内地域の海民及び海賊）は、「倭人」又は日本列島の住民であるにもかかわらず、村井氏の定義する「境界人」に含まれない。しかし、三島の住民と瀬戸内地域の海民の間の類似性、そして三島の住民、朝鮮半島南海岸の住民、中国南東海岸の住民の間の類似性を比較したところ、前者を一つの集団として捉えるのは難しく、後者を一つの集団として捉えるべきであると言えるほど、その類似性の度合いにおいて明確な違いがあるのかは疑問である。

このように恣意的に定義された集団の概念をもって実際に具体的な事件や現象について説明する場合、様々な問題に逢着する蓋然性が高い。例えば、「境界人が倭寇の主体であった」と主張するのであれば、これは自ずと、村井氏の設定した「境界人」の定義に基づいた、「朝鮮半島南海岸の住民は倭寇集団の一部であり、九州南部、瀬戸内地域の住民、海賊、武士らは倭寇ではなかった」という意味での結論につながるため、「倭寇とは誰か」という争点は、村井氏によって「境界人」の集団の範囲が確定された時点でこれ以上論ずる必要のないものになってしまうのである。

### (3) 「境界人」概念の不明確性

上述したように「境界人」という概念については、定義の仕方の如何にかかわらず上記で指摘した問題を避けて通ることは難しいと思われる。「境界人」という概念を用いて倭寇など特定な歴史的事件又は現象について説明する際には、まずその「境界人」の概念から明確に提示されるべきであり、それが提示されてこそ他の研究者による検討も可能となり、より精緻な議論へと深化・発展させていけるであろう。

## Ⅲ. 村井氏の<倭寇=境界人>説の立論についての検討

第三章では、境界人の概念を14～15世紀の倭寇に適用した<倭寇=境界人>説の立論過程について検討したい。以下では特に、村井氏の見解が集約されている最近の著書『日本中世世界史論』第2部「海域社会と境界人」第1章「倭寇とはだれか」第2節「倭寇の実像にせまる」<sup>20)</sup>の議論をその記述順に沿って検討しよう。

村井氏はまずこの中で、倭寇の中核は「三島」の倭人であったとしながら（第1小節）、そのうち領主層を除く住民層だけが倭寇であったが（第2小節）、倭寇活動において見受けられる反国家的性格からして、ここには「異質な要素」、即ち高麗人たちが大量に流入していたであろうと見られ（第3小節）、結局、

倭寇、濟州人、禾尺・才人など反政府行動を共通項とする「境界人」が共に活動していたという結論に至っている（第4小節）。

## 1. 倭寇の中核としての三島倭人について

### (1) 倭寇の中核としての三島倭人

村井氏はまず、第1小節において、倭寇の活動期間中、「倭寇」という言葉の「倭」は「日本国」とは明確に区別されていたとしながら、「倭人」は対馬、壱岐、博多などの「三島」<sup>21)</sup>を中心に住む人々であり<sup>22)</sup>、この三島の「倭人」が倭寇集団の中核であったと主張する<sup>23)</sup>。

しかし、三島の各地方が「倭」としてのみ認識され「日本」とは区別されていたという村井氏の見解<sup>24)</sup>とは異なり、この地域を「日本」と呼んでいる事例は史料上大変多い。例えば、朝鮮王朝の建国から15世紀末までの100年余りの間、『朝鮮王朝実録』において「日本」又は「日本国」という記述の後に「対馬」、「壱岐」、「松浦」、「覇家臺」（博多）など三島の地名、又は「志佐」、「田平」、「鴨打」など三島地域の領主の名が記録されている箇所は少なくとも1,000以上確認される<sup>25)</sup>。また『朝鮮王朝実録』では「昨見慶尚道監司啓本、日本国使臣出来云。大抵如此倭使出来、...」<sup>26)</sup>のように「日本」と「倭」という二つの表現が一つの文章で同時に使用されるなど、「日本」と「倭」の用語を混用している事例<sup>27)</sup>も多い。一方で村井氏の主張を裏付けできる史料上の根拠は乏しい。

また村井氏は、第1小節において当時の史料に登場する「倭」又は「倭人」という用語を三島を中心に生活する日本人に縮小して解釈すべきであると主張しているが、同書『日本中世境界史論』の中でこの「倭人」という用語を日本人、中国人、朝鮮人、ポルトガル人を含むニュアンスの言葉に拡張して考えるべきである<sup>28)</sup>という正反対の見解も同時に示している。同時期の「倭人」という用語に対して同じ著書の中で二つの対立する見解が同時に提示されているのである。

上記のような理由から、村井氏の見解は受け入れ難いと言わざるを得ない<sup>29)</sup>。むしろ『禰寝文書』にある内容を根拠として、「倭寇の供給源が三島をはみ出して南九州の大隅におよんでいた」<sup>30)</sup>という点、『太平記』<sup>31)</sup>において高麗と元を侵攻した倭寇に関し「賊船の異国を犯し奪ふ事は、皆四国、九州の海賊どもがなす処」<sup>32)</sup>と記述している点などを踏まえると、倭寇の出身地が三島に限られていたわけではなかったことが分かる。

### (2) 領主層の倭寇活動への参加

村井氏は、第2小節において倭寇行為の主体は「境界人」の住民層であり、領主層は倭寇そのものであったとは言えないとしている。<sup>33)</sup>

村井氏が引用した『世宗実録』の記録<sup>34)</sup>によると、朝鮮側の海賊統制要求に対し、壱岐島の住民層である藤九郎は朝鮮側の要求に協力したが、鴨打道秀など3人の領主層は海賊と親密な関係にあったとしている<sup>35)</sup>。村井氏は、「とはいえ倭寇行為の主体はあきらかに住民層であり、...「境界人」であった。...領主層は...倭寇そのものとはいえない。」<sup>36)</sup>とし、上述した史料の内容を否定するような結論を打ち出しながらも、その論拠については明確に提示していない。村井氏は同書『日本中世境界史論』の後半部において領主層が海賊行為の統制者であると同時に「援助者や加担者」であったとしているが<sup>37)</sup>、こ

ちらの見解の方がむしろ上述した史料の趣旨を充実に反映していると思われる。いずれにせよ、上記のような二つの見解は互いに矛盾していると思われ、村井氏の見解については正確に理解し難い。

一方で、領主たちが積極的に倭寇勢力を主導していたと思われる史料もある。『高麗史』には、1377年黄山江の戦いについて「霸家臺萬戸」、即ち博多地域の守護又は地頭などの領主層に当たる者が倭寇の長であったと記録されており<sup>38)</sup>、1380年荒山の戦いについては、倭寇の長である阿只拔都の行動や彼に従う将たちの態度が単なる海民の長とその部下としての姿ではなく、当時の室町時代の武士たちの行動とほとんど一致する姿に記録されている<sup>39)</sup>。

したがって、九州又は西日本の領主層は単なる倭寇の援助者又は加担者であっただけでなく、当時の倭寇活動を主導していたという事実があったとみることができるであろう。

## 2. 倭寇活動の反政府性と高麗人による関与の可能性について

村井氏は、第3小節において、「観応の擾乱」期に三島の住民によって食糧獲得を目的に倭寇活動が始まったとした後<sup>40)</sup>、その倭寇の活動から見える反国家性<sup>41)</sup>からして倭人以外の異質な要素、即ち高麗人の参加が窺えると主張している<sup>42)</sup>。

この小節における論理の流れの第一段階として「倭寇行為の反国家性」に関しては、1357年の昇天府興天寺における忠宣王夫婦御眞（肖像画）窃盗事件のみがその根拠として提示されている。

一般的に、ある行為又は事件における「反国家性」又は如何なる意味での政治性は本来、その行為の外見上の姿だけで断定できるものではなく、その主体の正体及びその行為の目的を先に解明してこそ、その行為又は事件における「反国家性」又は政治性についての結論を導き出せるものと思われる。

こうした点から、国王の肖像画窃盗事件に反国家性という性格を付与するためには、その主体が高麗人であったという前提が必要であると考えられる<sup>43)</sup>。しかし当事件は、14～15世紀倭寇の初期段階において発生したものであるため、その倭寇の構成員に高麗人が含まれていたということを裏付ける史料上の根拠が全くない。また、倭寇に高麗人が参加していたとしている日本人研究者たちの見解をもって見ても、当事件が発生した1357年前後に高麗人が倭寇に参加していたということを支える論拠は見当たらない。したがって当事件の発生時期に倭寇活動に参加していた倭人が当窃盗事件の主体であったと捉えるべきであり、この点だけをもって、高麗人の倭寇への参加を前提とする倭寇活動の反国家性という命題は成立しない。

次に、上述した「反国家性」の概念の根拠を補強するためのものと思われる村井氏の注釈20番には、1366年の影殿及び陵墓の大土木工事に対する高麗人の不満が上記窃盗事件の原因であったとみる記述があるが<sup>44)</sup>、1366年の大土木工事は、1357年発生した忠宣王肖像画窃盗事件より時期的に遅いため、前者を後者の原因とみることはいえない。

したがって、倭寇集団を「境界人」として規定するための論理の流れの第一段階である「反国家性」ないし「政治性」についての論証段階から、その妥当性に対する疑問が拭えないのである。

また、第3小節における村井氏の主張は「倭寇行為の反国家性⇒倭寇による首都開京への脅威行為の政治性⇒高麗人の倭寇への参加」という流れに集約できるが<sup>45)</sup>、上述した通り、倭寇の行為に反国家性又は政治性があったという命題には、高麗人が倭寇活動に参加していたという前提が隠れていた。つま

り村井氏は、高麗人の倭寇への参加という前提の下で、高麗人が倭寇に参加していたという結論を導き出したものとみられるが、こうした論理は循環論理であると思われる。

上記のように論理的な問題点があり、関連する史料が乏しい村井氏の論理は納得し難い。

### 3. 倭寇の活動に関与したと言われる高麗人たちについて

村井氏は、第4小節において倭寇集団に参加したであろうと主張する高麗人を挙げ<sup>46)</sup>、彼ら「倭寇—濟州人—禾尺・才人は、反政府行動を共通項とする境界人」であったと結論付けている<sup>47)</sup>。本稿では、こうした高麗人集団のうち、村井氏が結論において言及した濟州人及び禾尺・才人に関する議論に焦点を当ててみたい。

#### (1) 濟州人

村井氏は、1376年から倭寇集団内で多くの馬や大規模な騎兵部隊が出現して、倭寇が内陸の奥まで進出したという事実について指摘しながら、耽羅の「韃靼牧子」又は「耽羅牧子」と呼ばれる勢力による馬の大量供給がその背景にあったとし、したがって濟州人も倭寇に参加したものとみられるという見解を示している。

こうした「濟州人＝倭寇」説は、1987年に田中健夫氏と高橋公明氏によって提起されていたものであり、これに関しては既に李領氏の研究など<sup>48)</sup>を通して批判されているが、こうした点に加え、次の側面についても考えてみる必要がある。

第一に、村井氏が注目した「耽羅牧子」集団は、1374年8月に崔瑩など高麗軍の攻撃を受けた結果、指導者たちは処刑され、ほぼ全ての耽羅牧子集団が完全に根絶されている<sup>49)</sup>。その後濟州島には、朝鮮半島本土に進出する能力を有して台頭する軍事勢力はいなかった。したがって「耽羅牧子」集団は1376年以降大量に出現した倭寇の騎兵部隊に馬を供給したり、朝鮮半島内における倭寇活動に参加することはできなかつたとみられる。

第二に、倭寇の中核は対馬人及び対馬経由者であったため<sup>50)</sup>、馬の流入経路もまた同経路であった可能性が遥かに高いとみられる。また濟州島は、朝鮮半島と直線距離が90km以上離れているが、対馬は朝鮮半島との直線距離が僅か50km程度であり、対馬—壱岐—九州へと繋がる各航路も濟州島—韓半島の距離より短い。その上、対馬で生産される馬は「対州馬」と呼ばれ、武士の馬として中央に献上されていたほどであり<sup>51)</sup>、松浦地域の人々も8世紀から馬の飼育や輸送に慣れていたという<sup>52)</sup>。したがって、濟州島を通して馬が供給されていたと主張するためには、対馬又は九州を通しては不可能であったことと、海路がより長い濟州島を通して如何に可能であったかという両方が論証されるべきである。

第三に、濟州島から倭寇の軍馬が供給されたという仮説で共に説明されるべき問題は、その大規模な軍馬に乗って荒山戦闘など高麗軍との本格的な戦争を遂行した騎兵の正体である。高麗人被虜人又は禾尺・才人などの下層民たちには騎兵として必要な高度の乗馬技術及び戦闘技術を期待することができないため、彼らが当時その騎兵であった可能性は低い。結局、日本から対馬を経由して朝鮮半島に渡った日本人たち、とりわけ武士階層又は領主層の人々を除いては、1376年以降の大規模な倭寇騎兵について説明し得ない。

第四に、この小節において村井氏は、『高麗史』の史料を翻訳・引用し、下記のような見解を示しているが、その翻訳が原文の趣旨を忠実に反映させているか疑問である。

1372年に洪武帝が高麗使者に示した親諭に「㉔我れ聴き得たり、恁那(その)地面の裏(うち)に、倭賊縦横に劫掠し、浜海の人民避怕逃竄して、鎮遏(ちんあつ)能はず。…㉕耽羅牧子の若(ごと)き、毎(つね)に此等賊徒と一処に相合ふ有り。呵(ああ)勦捕的(の)較(やや)有り難し」とあることが注目される。耽羅牧子が倭寇に合流していることが明らかで、ここに濟州島の馬を倭寇につなぐリンクが見いだされる。<sup>53)</sup>

まず上記史料は、明皇帝が高麗の朝廷に耽羅牧子を討伐することを促す趣旨で送った文書に関するものである。史料の原文のうち㉔文章と㉕文章の間には、村井氏がその引用を割愛した重要な文章が一つあり、その文章の内容は「その海賊たちが海を渡り我々の領土でも略奪行為を行ったため、我は海辺村の守御官に命令を下し、倭寇の船13隻を拿捕させた。」という趣旨である<sup>54)</sup>。村井氏の翻訳にこの文章を含めて読んでみると、「㉔高麗は倭寇を防げない⇒明は倭寇を撃退した⇒㉕耽羅牧子が倭寇に参加しているため我々も彼らを討伐し難い」となり、意味が通じなくなる。また当時明皇帝が高麗に送った文書の目的まで考慮すると、明さえも防げなかった耽羅牧子を高麗に討伐させるという不可解な結論に至ってしまう。

したがって㉕文章に該当する原文のうち、村井氏が「若(ごと)き」と解釈した「若」は「若し」に解釈した方が、前後の文脈からして適切であると考えられる<sup>55)</sup>。この場合、㉕文章は「もし耽羅牧子はその海賊の徒党と力を合わせることになれば、(明としても)彼らを討伐するのが多少難しくなりそうだ」と解釈することができ、こうした連合が結成される前に高麗が急いで耽羅牧子を討伐すべきであるという明皇帝の文書の趣旨とも符合する。したがって上記史料の正確な意味に基づけば、上記史料もまた、耽羅牧子と倭寇が連合していたという証拠にはなれないのである。

上述した点を総合すると、耽羅牧子など濟州人が倭寇の構成員であったり、倭寇に参加していたという村井氏の見解には同意し難い。

## (2) 禾尺・才人

村井氏は、第4小節において禾尺・才人については詳しく記述していないが、彼の著書『日本中世境界史論』の他の部分において禾尺・才人について言及しているため<sup>56)</sup>、ここではまず同書で彼が引用・説明した15世紀初の史料を見てみよう。

「洪州の人李成、懷安君の子孟宗の家奴に言ひて曰く、「州人李才、密かにその子乙生に語り曰く、「㉙吾れ禾尺・才人を率ゐ、洪州の界に草竊せば、則ち以て志を得べし矣。㉚三島の倭と合謀して本国に寇さば、則ち以て城を屠り地を略すべし。而して前日懷安の乱、斯れ下と為さん矣。」」(世宗3年(1421)正月癸酉)

政府への反逆を企てた忠清道洪州の人李才は、まず禾尺・才人を率いて洪州で草賊として蜂起し、

ついで三島倭寇と謀議をめぐらして侵略すれば、城を陥落させ、土地を略取することができる、という戦略を息子に語った。禾尺・才人と倭寇が直接つながっているわけではないが、李才を媒介者として連合が成立する可能性を示す例である。<sup>57) 58)</sup>

村井氏が引用した上記史料の内容をその引用が割愛された内容と共に見てみると、史料に対する彼の説明が史料の原文と一致しないことが分かる。

第一に、㉔文章と㉕文章の間には、「如不得志」という史料原文上の句の引用が抜けている。この句を含めて読んでみると、上記史料の内容は禾尺・才人の蜂起が思い通りにならない場合、その代案として三島倭寇と謀議するという趣旨になる。即ち、上記内容はそもそも禾尺・才人と三島倭寇が連合するという計画に関して語ったものではなかったのだ。

第二に、上記の引用文の続きには、朝鮮の朝廷で調査した結果、上記の引用文が事実無根であったためその内容を伝えた李成という者を誣告罪で処罰したという内容がある<sup>59)</sup>。即ち、上記の引用文は全て李成による嘘であったという点が史料において明確に記されているのである。

したがって、禾尺・才人と倭人が連合する可能性があったという村井氏の見解は、正確でない史料引用によるものとみられるため同意し難い。

#### 4. 反政府行動を共通項とした「境界人」について

村井氏は、第4小節の末尾において「倭寇—濟州人—禾尺・才人は、反政府行動を共通項とする境界人として、同一の地平で捉えることができる。<sup>60)</sup>」という文章を結論としている。

上記文章に登場する濟州人、禾尺・才人、反政府行動、境界人などについて上述した内容を総合してみると、村井氏の上記文章には再検討すべき箇所が多いことが分かる。その上、村井氏の主張そのものにも疑問が残る。

第一に、倭寇を構成する主体の側面から、村井氏は、第4小節においては上記の引用文と同じ見解を示しているが、一方で同書『日本中世境界史論』の他の箇所においては、「倭寇」と「境界人」という二つの用語を同義語のように使用している<sup>61)</sup>。即ち、同じ著書の中で「倭寇+濟州人+禾尺・才人=境界人」と「境界人=倭寇」という互いに矛盾する二つの等式が提示されているため、濟州人と禾尺・才人が倭寇の構成員であるかどうかに対する村井氏の見解について混乱が生じる。

第二に、倭寇との連合活動という側面から、村井氏は、『日本中世境界史論』の後半部において、14世紀禾尺・才人の假倭活動に関する記録は「いずれも、倭賊を偽装したということ」であるだけで、「倭賊と連合してひとつの集団となって倭寇行為をやったということではない」などとしているため、彼らが倭寇と連合したという田中健夫氏の見解には同意していないように思われる<sup>62)</sup>。しかしながら一方では、(i) 濟州島の牧胡と禾尺・才人の一部の行為の中に「倭寇との連合が確認された」<sup>63)</sup>、(ii) 「耽羅牧子が倭寇に合流していることが明らか」だ<sup>64)</sup>、(iii) 「濟州島や朝鮮半島南辺...の海民たち...、倭人...、前者と後者が連合する事態も生じた」<sup>65)</sup>、(iv) 假倭活動を行った禾尺・才人は、当時「濟州人や韃靼とならべて、問題を含む人たちと認識していた」と評価し、「倭寇の多民族化の萌芽は、たしかに14世紀にある」などと記述しており<sup>66)</sup>、14世紀濟州人と禾尺・才人が果たして倭寇と連合して活動をしていた

かに関する村井氏の見解にも矛盾が発見される。

上記の通り、倭寇、済州人、禾尺・才人を一つの境界人として捉えるという村井氏の見解は、その立論過程の各段階において論理的・史料上の問題があるだけでなく、果たして村井氏自らが済州人と禾尺・才人を倭寇として捉えていたのかなどに関する彼の結論そのものも明確でないように思われる。

#### IV. おわりに

1987年、ほぼ同時期に発表され、日本の倭寇研究者らに多大なる影響を及ぼした田中氏の「高麗・朝鮮人主体説」と高橋氏の「高麗・日本人連合説」については、韓国及び日本の多くの研究者らによって様々な批判が提起されてきており、その結果現在は、上記学説は本来の趣旨を維持できなくなった。にもかかわらず、村井氏の〈倭寇＝境界人〉説が上記学説の弱点を補完する役割を果たしてきたことから、日本の研究者の間では、高麗人が倭寇活動に参加していたという結論が1980年代後半以降、維持されてきたように思われる。

しかし、村井氏の〈倭寇＝境界人〉説では、史料の引用や論理の展開過程において様々な問題点が発見され、彼の主張する論旨そのものにも曖昧なところが多い。このように〈倭寇＝境界人〉説の理論体系やその立論過程に多くの問題点が発見される状況で、これらの問題点が十分補完されない限り、高麗人が倭寇活動に参加したという見解に対する論拠は大変乏しくなるのではないかと思われる。

ではこれからは、倭寇の実体は誰であり、彼らがいかなる目的をもって倭寇活動をするようになったのかについて、関連する史料に対する忠実な理解を基に、いかなる先入観も捨て再度吟味する必要があるであろう。そしてこうした試みは、初めて倭寇が出現し、倭寇の活動期間中引き続きその出発地であった九州など西日本地域の当時の情勢及びその領主層や住民たちの動向に関する研究から始まるべきであろう。

#### 注

- 1) 佐伯弘次「海賊論」 荒野泰典・村井章介・石井正敏編『アジアのなかの日本史Ⅲ 海上の道』東京大学出版会、1992、45頁。
- 2) 田中健夫「倭寇と東アジア通交圏」 朝尾直弘・山口啓二・網野善彦・吉田孝編『日本の社会史1：列島内外の交通と国家』岩波書店、1987、139～181頁。
- 3) 高橋公明「中世東アジアにおける海民と交流—済州島を中心として」『名古屋大学文学部研究論集史学』33、1987、175～194頁。
- 4) 李頌「高麗末期倭寇の実像と展開—『高麗史』の再検討による既往説批判」『倭寇と日麗関係史』東京大学出版会、1999。
- 5) 浜中昇「高麗末期倭寇集団の民族構成—近年の倭寇研究に寄せて」『歴史学研究』685、1996、51～60頁。
- 6) 第Ⅱ章における議論についてのより詳しい内容は、宋鍾昊「村井章介の「境界人論」およびその倭寇の研究体制に対する批判的検討」『韓国中世史研究』46、2016、345～373頁を参考されたい。
- 7) 村井章介『日本歴史 私の最新講義 12：境界史の構想』 敬文舎、2014（以下『境界史の構想』）、306頁参照。
- 8) 村井章介『境界史の構想』19頁。
- 9) 村井章介『日本中世境界史論』岩波書店、2013、142頁。
- 10) ブルース・バートン『日本の「境界」—前近代の国家・民族・文化』青木書店、2000（村井章介、『境界史の構想』85頁より再引用）。

- 11) 村井章介『境界史の構想』82頁。
- 12) 村井章介『境界史の構想』63頁、280頁など；村井章介『境界をまたぐ人びと』山川出版社、2006、3頁。
- 13) こうした点を踏まえ、「境界」の概念について、ある特定の民族が他の民族又は国家のバウンダリー（boundary）の中に入り、交易・海賊行為などの活動を通してフロンティア（frontier）を形成していく姿であると修正して把握し、それによる適切な理論体系が構築されるのであれば、それなりに意味のある新しい境界人論が形成され、それを基にした地域史研究が行われる余地があると思われる。但し、この場合、そのフロンティア（frontier、修正された「境界」）の概念における境界空間は、従来の「境界」の概念における境界空間とは異なるものになる必要がある。こうした修正された「境界」の概念の下では各民族又は地域民を対称的かつ双方向的に理解するのは困難であるため、境界空間内の各民族に関する記述は区分して行われる必要があるだろう。
- 14) 高麗時代における禾尺・才人とは、柳器・皮物の製造及び屠畜・狩猟・肉類販売などに従事していた下層民を指していた。才人の場合、歌舞を生業とする者もいた。
- 15) 村井章介『境界史の構想』110～111頁；村井章介『日本中世境界史論』203～206頁；村井章介『境界をまたぐ人びと』58～61頁など。
- 16) 村井章介『中世倭人伝』岩波書店、1993、44～47頁。
- 17) 村井章介『境界をまたぐ人びと』58～61頁など。
- 18) 村井章介『境界史の構想』225～233頁、282頁など。
- 19) 村井章介『中世倭人伝』3頁；村井章介『境界史の構想』20頁、39頁、121頁、132頁；村井章介『日本中世境界史論』135～139頁など参照。
- 20) 村井章介『日本中世境界史論』128～137頁。
- 21) 同書、129頁。しかし日本の研究者の間では「三島」が対馬、壱岐、肥前松浦地方を意味するという説の方がより一般的に受け入れられている（佐藤信・五味文彦・高埜利彦・鳥海靖編『詳説日本史研究』山川出版社、2008、193頁など参照）。
- 22) 村井章介『日本中世境界史論』128～129頁。
- 23) 同書、129～130頁。
- 24) 同書、142頁も参照。「倭」は「日本」と相対的にくべつされる、九州西北地域を中心とする経済空間の名である。」
- 25) 韓国の国史編纂委員会がオンライン上で提供している韓国史データベース『朝鮮王朝実録』を用いて筆者が直接計数した値であるため多少の誤差は存在し得るが、朝鮮前期の各国王の在位期別にて、太祖3回、定宗3回、太宗63回、世宗50回、文宗5回、端宗69回、世祖256回、睿宗22回、成宗542回、燕山君24回など計1,037回以上の事例が確認できた。
- 26) 『中宗実録』巻62、中宗23年8月己未。『中宗実録』巻83、中宗32年2月乙卯、『仁宗実録』巻2、仁宗1年6月癸卯などでも「日本使」や「倭使」などといった言葉が同じ分段の中で使われている。
- 27) 『太祖実録』巻11、太祖6年3月辛酉；『太宗実録』巻19、太宗10年1月乙亥；『太宗実録』巻21、太宗11年4月丁酉；『世宗実録』巻82、世宗20年8月乙丑；『世祖実録』巻2、世祖1年12月己酉；『成宗実録』巻58、成宗6年8月戊子；『中宗実録』巻104、中宗39年8月辛未；『明宗実録』巻17、明宗9年7月庚戌など。
- 28) 村井章介『日本中世境界史論』150頁。「倭」ということは、狭い意味では日本人を指すばあいもあるけれども、民族的には他の出自のもの、多くは中国人であるが、その他朝鮮人だとかポルトガル人だとかも含んで使われることがある、使うことができる、そういう意味合いのことばだと考えざるをえない。」
- 29) 日本の研究者たちの支配的な見解としても「倭」と「日本」を厳格に分別していないと思われる。例えば、田中健夫『倭寇一海の歴史』講談社、2012（同タイトルの1982年の著書を再発刊したもの）、18頁、21頁などを参考されたい。
- 30) 村井章介『日本中世境界史論』132頁。彼は『禰寝文書』永徳元年八月六日室町幕府御教書案を引用した上で、その内容について上記本稿のように記述している。引用文は、1381年室町幕府管領の斯波義将が大隅国守護今川了俊に出した指令で、その原文は次の通りである。「当國悪黨人等、渡高麗致狼藉由事、嚴密可加制止、若猶不承引者、爲有殊沙汰、可注申名之状、依仰執達如件。」
- 31) 『太平記』は、村井氏も引用しているが、上記本稿で述べた部分については引用していない。（村井章介『日本中世境界史論』132頁参照）
- 32) 『太平記』巻39、「高麗入来朝の事」（兵藤裕己 校注『太平記（六）』岩波文庫、2016、178頁）。
- 33) 村井章介『日本中世境界史論』131頁。
- 34) 『世宗実録』巻104、世宗26年5月壬子；村井章介『日本中世境界史論』130頁。
- 35) 村井章介『日本中世境界史論』131頁。
- 36) 同書、131頁。
- 37) 同書、142頁。

- 38) 『高麗史』 卷 116、列伝 29、朴葳。「時江州元帥裴克廉、又與倭戰。賊魁霸家臺萬戶、著大鐵兜鍪、至手足皆甲、令步卒翼左右、躍馬而前。馬旋濤而止、我軍迎擊斬之。」；李嶺「倭寇の主体」『倭寇・偽使の問題と韓日関係』景仁文化社、2005、193 頁。
- 39) 『高麗史』 卷 166、列伝 39、邊安烈。「初阿只拔都在其島、欲不來、衆賊服其勇銳、固請而來。諸賊酋每進見、必趨跪、軍中號令、悉主之。」；李嶺「倭寇の主体」193～194 頁参照；二木兼一「出陣日記」『中世武家の作法』吉川弘文館、1999。
- 40) 村井章介『日本中世境界史論』132 頁。
- 41) 同書、132～133 頁。
- 42) 同書、133～134 頁。
- 43) 14 世紀の倭寇の目的に 13 世紀の蒙古襲来に対する復讐の性格があったため、これを「反国家性」として拡張解釈したと考えることもできるであろう。しかし、このように倭人が主体となれる広い概念での「反国家性」を採択する場合、倭寇活動が「反国家的」であるため高麗人が参加したという主張は論理性を失うことになる。こうした論理の誤謬は実際に見受けられている。例えば橋本雄氏は、村井氏の見解を引用し、「たとえば、14 世紀半ば—15 世紀初頭に京畿道域を襲撃した倭寇集団は、首都開城付近を襲撃したり、王家の人間の肖像画を収奪したりするなどの政治性が認められ、高麗人主体の「倭寇」であった可能性がある」としている。（橋本雄「東アジア世界の変動と日本」大津透・桜井英治・藤井讓治・吉田裕・李成市編『岩波講座日本歴史』8 中世 3、岩波書店、2014、43 頁。）
- 44) 村井章介『日本中世境界史論』146 頁。
- 45) 同書、133～134 頁。
- 46) 同書、134～136 頁。
- 47) 同書、136～137 頁。
- 48) 例えば、李嶺「高麗末期の倭寇の実相と展開」222～232 頁参照。
- 49) 『高麗史』 卷 44、恭愍王 23 年 8 月；『高麗史』 卷 113、列伝 26、崔瑩など参照；『中宗実録』 卷 15、中宗 7 年 2 月庚寅。「初濟州人殺安撫使、崔瑩伐之而後始定。」；李嶺「高麗末倭寇＝「多民族・複合的海賊」説に関する再検討」『バクス・モンゴリカの動搖と高麗末倭寇』93～94 頁参照。
- 50) 村井章介『日本中世境界史論』134 頁。
- 51) 李嶺「高麗末期の倭寇の実相と展開」214 頁。
- 52) 李嶺「「庚寅年以後の倭寇」と松浦党—禡王 2～3 年（1376～1377）の倭寇を中心に」『皇国史観と高麗末倭寇』エピステム、2015、165 頁。
- 53) 村井章介『日本中世境界史論』136 頁；引用された原文は『高麗史』 卷 43、恭愍王 21 年 9 月壬戌。「帝賜王藥材、親諭子温など曰、「前年、恁國家、爲耽羅牧子的事、進將表文來呵。我尋思、這耽羅的牧子、係元朝達達人、本是牧養爲業、…又怎的如此作亂有？我如今國王根底、與將書去有恁到那裏國王根底備細說者。休小覷他、多多的起將軍馬、盡行勦捕者！⑩我聽得恁那地面裏倭賊縱橫、劫掠濱海、人民避怕逃竄、不能鎮遏。致使本賊過海前來作耗的上頭、我這裏戒飭沿海守禦官、見獲到前賊船一十三隻有。⑪若耽羅牧子每、與此等賊徒、相合一處呵、勦捕的較難有。」」（下線は村井氏が引用した部分）
- 54) 原文は上記脚注 53 番の⑩文章と⑪文章の間の文章を参考されたい。
- 55) 韓国の国史編纂委員会の韓国史データベースのうち、『高麗史』（2015 年修正版）及び景仁文化社発行『国訳高麗史世家』（2008 年）でも全て「若」を「若し」と解釈している。ちなみに、本文で引用した史料にある「每」は、助詞として使用される場合、人称代名詞または名詞の後ろで複数の格助詞として使われ、宋元時代の口語では現代中国語での「們」と同じ意味で使用された。（『在线新华字典』<http://tool.httpcn.com/Html/Zi/28/PWMEUYRNRNTBBCF.shtml>；白水社『中国語辞典』もほぼ同様に説明している。<http://cjjc.weblio.jp/content/%E6%AF%8F>）
- 56) 村井章介『日本中世境界史論』136 頁、137 頁、159～161 頁など参照。
- 57) 同書、137 頁。
- 58) 『世宗実録』 卷 11、世宗 3 年正月癸酉。「洪州人李成言於懷安君子孟宗家奴曰：「州人李才密語其子乙生曰：「◎吾率禾尺才人、草竊洪州界、則可以得志矣。如不得志、⑫與三島倭合謀、寇本國、則可以屠城略地、而前日懷安之亂、斯爲下矣。」」孟宗聞之、告牧使趙琬。琬率李成、騎駟赴京直啓、上命義禁府鞠之。成以誣告、杖一百、流三千里。」（下線部分は村井氏が引用した部分）
- 59) 原文は脚注 58 番の⑫文章に続く文章を参考されたい。
- 60) 村井章介『日本中世境界史論』136～137 頁。
- 61) 同書、142 頁。「倭寇」という語自体の意味は、…その名で呼ばれた人間集団の実体をそのままあらわすものではなく、より実体に近い姿をとらえて呼ぶとすれば、「境界人」の語がふさわしい。」
- 62) 同書、160 頁。

- 63) 同書、137 頁。
- 64) 同書、136 頁。
- 65) 同書、143 頁。
- 66) 同書、160～161 頁。

## 参考文献

### [史料]

- 『高麗史』
- 『高麗史節要』
- 『朝鮮王朝實錄』（『太祖實錄』から『明宗實錄』まで）

### [韓国語]

- 韓日関係史研究論集編纂委員会 編『倭寇・偽使の問題と韓日関係』景仁文化社、2005。
- 李頌『パクス・モンゴリカの動揺と高麗末倭寇』図書出版ヘアン、2013。
- 李頌『皇国史観と高麗末倭寇』エピステメ、2015。
- 宋鍾昊・李頌「書評：ベンジャミン・H・ハザード、「中世韓半島における日本人の掠奪活動：高麗末期の倭寇の影響」（カリフォルニア大学バークレー校 博士学位論文、1967）」『韓国中世史研究』45、2016、349～361 頁。
- 宋鍾昊「村井章介の「境界人論」およびその倭寇の研究体系に対する批判的検討」『韓国中世史研究』46、2016、345～373 頁。

### [日本語]

- 荒野泰典・村井章介・石井正敏 編『アジアのなかの日本史Ⅲ 海上の道』東京大学出版会、1992。
- 大津 透・桜井英治・藤井讓治・吉田 裕・李 成市 編『岩波講座 日本歴史』8 中世 3、岩波書店、2014。
- 佐藤 信・五味文彦・高埜利彦・鳥海 靖 編『詳説日本史研究』山川出版社、2008。
- 高橋公明「中世東アジアにおける海民と交流—濟州島を中心として」『名古屋大学文学部研究論集 史学』33、1987、175～194 頁。
- 田中健夫「倭寇と東アジア交通圏」、朝尾直弘・山口啓二・網野善彦・吉田 孝 編『日本の社会史 1: 列島内外の交通と国家』岩波書店、1987、139～181 頁。
- 田中健夫『倭寇—海の歴史』講談社、2012。
- 村井章介『中世倭人伝』岩波書店、1993。
- 村井章介『境界をまたぐ人びと』山川出版社、2006。
- 村井章介『日本中世境界史論』岩波書店、2013。
- 村井章介『日本歴史 私の最新講義 12：境界史の構想』敬文舎、2014。
- 李頌『倭寇と日麗関係史』東京大学出版会、1999。

